# ひょうたん島通信

大槌発! 第37回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱(ほうらい)島という小さな島があります。
井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。
ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

## 鴫(しぎ)来たりなば春遠からじ

**早川 淳**　大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
生物資源再生分野 助教

このコラムのタイトルにもなっている“ひょうたん島”は当センターの目の前にある蓬莱島の愛称ですが、センターの前に位置する港からこの島へと続く堤防が2013年に再建されました。私はバードウォッチングが趣味なもので、お昼休みや夕方に時々この堤防から海鳥を双眼鏡で観察していたのですが、ある時、ウミネコなどのカモメ類が堤防周辺でエゾアワビやウニ類といった底生動物を捕食していることに気が付きました。私の研究テーマは、貝類やウニ類などの生態でして、バードウォッチングはあくまで趣味であったのですが、底生動物の生態学的研究をする上で鳥類による捕食もモニタリングする必要性が生じたのです。そんなわけで、大槌に滞在中はほぼ毎日“バードウォッチング”をしています。

基本的にはカモメ類の出現状況のモニタリングと行動観察が主ですが、堤防周辺に出現する鳥類相もバードウォッチャーの性として記録しており、これまでに25種の鳥を確認しました。堤防周辺ではそれぞれの鳥が様々な行動をしています。潜水して魚を捕えるウミアイサというカモの横に餌を奪い取るべくウミネコがぴったり併走していたり、ハシボソガラスが空中からクルミを何度も落として割ったり、ある夕方に堤防上を歩いていると何と堤防の上で寝ていたカルガモが驚いてけたたましい羽音と共に飛び去ったりと見ていて飽きることはありません。冬のある日、カモメ類が岩場に集まって競い合うように海に飛び込んでいるのを目撃し、「これは何か重要な捕食シーンなのでは!?」と思って雪の中30分ほどビデオを回し続け、コマ送りで何度も映像を確認した結果、捨てられた魚の頭を奪い合っていただけなことが判明し、がっくりきたこともありました。

オオセグロカモメ達が岩場で何かを奪い合う貴重な捕食シーンかと思いきや…。

この“バードウォッチング”で面白いのは、季節によって出現する鳥が変わっていくことです。カモメの中にオオセグロカモメやセグロカモメが増えると真冬になったのだなと感じますし、美しい羽色のシノリガモやスズガモが見えなくなると冬の終わりを感じます。このコラムが掲載される頃には、大槌でも桜のつぼみがほころび始め、北へと帰る途中、羽を休めるためにふらっと現れるキアシシギやキョウジョシギが観察されていると思います。個人的には、何時かものすごい珍鳥が出現して欲しいなぁと思いつつ、今日もカモメ達を観察しております。

## 調査船 弥生のつぶやき

### 6回目の3月11日

国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早3年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のぴーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

穏やかな日差しに包まれた平成29年3月11日、大槌町役場において、五神総長、古谷理事はじめ本学関係者ご臨席のもと「大槌町東日本大震災津波追悼式」が執り行われました。祭壇には、東日本大震災の犠牲となられた大槌町の方々の人となりについて、聞き取り調査を基に記された「生きた証回顧録」が、参列者の献花とともに奉納されました。

東日本大震災発生時刻の午後2時46分には、大槌町内の防災行政無線が一斉にサイレンを鳴らし、追悼式参列者はもとより、大槌町に生きる全ての人々が、犠牲となられた全ての方々へ一分間の黙とうを捧げられました。

その日の夜、赤浜では、大槌町で犠牲となられた方々のお名前がお一人毎記された灯篭1300個が、追悼の思いと共に流されました。

灯篭が一つ、また一つと、私の周りを通り過ぎ、沖へと流れていきます。私も心からの追悼の思いを籠め、灯篭を見送りました。

美しく厳かな灯篭の明かりが、私の周りを通り過ぎていきます。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）